

道博協ニュース

第29号

平成元年12月20日
北海道博物館協会
札幌市厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-(898)-0456

犬飼哲夫先生を偲ぶ

北川 芳男

昭和46年から50年迄本協会の会長を務め、その後も名誉会長として本会を指導し発展させてきた元北海道開拓記念館長の犬飼先生は、今年の7月31日、明治・大正・昭和を生き抜いて91歳の生涯を閉じた。一般的にみるならば、まさに天寿を全うしたといえると思うが、日頃お元気で、晩年になっても北の自然を愛し、その科学的な追求に意欲を燃やし続け、また、開拓記念館や北大農学部附属博物館の運営をはじめ、北海道の博物館施設の発展を常に念頭に置き話題にしていた先生を知るものとしては、もっと長くわれわれを指導してほしかったと思う気持で一杯である。

先生は、長野県松本市の出身である。大正5(一九一六)年、北大の前身である東北帝国大学農科大学予科に入学し、同8年(一九一九)、北海道帝国大学農学部農業生物学科に進学、動物発生学の研究や動物地理学上の「八田ライン」の提唱などで世界的に有名な八田先生に師事し、同11年(一九二二)卒業された。卒業後ただちに助手に採用され、助教授を経て、昭和5年(一九三〇)、32歳の若さで八田先生のあとを継いで農学部農業生物教室動物講座の教授に就任され、同時に、新設された理学部の動物学教室の教授も兼務することになった。助教授時代の大正15年から昭和4年にかけて、3年有餘アメリカとドイツに留学され、動物の発生学的な研究に取り組まれた。その後、先生の研究活動は専門の発生学の分野だけでなく、生態学をはじめ毛皮学、さらには民族学の分野にまで及んでいる。このことは、単に、先生が多才で幅が広いということではない。それは、先生が、専門の発生学を基礎として自然の総体(人間活動による自然の変化も含めて)を把握しようとした

真の意味での naturalist (博物学者) だったからである。実は、このような博物学的な言い換えると、自然史学的な学問の方法は、札幌農学校時代から北大に受け継がれた伝統だったと思う。いま、掛けがいのない地球を守るため、改めて博物学が見直されつつある。そんなとき、先生のような偉大な naturalist を失ったことは惜しんでもあまりある。

先生は、教授になられてから31年間附属博物館の館長として、同館の展示・資料・研究条件などの整備・充実や運営に力を注いだ。そして、北海道開拓記念館の設置が決定すると、その開設協議会の委員として開拓記念館のあり方や博物館活動の基本的事項について指導・助言し、同館の性格と目標を明確に示された。開館と同時に、初代館長に就任され、文字どおり、館職員とともに活動しながら、大小の難問を的確に処理され館活動の基礎を築いたのである。先生は、館職員を前にして口癖のように、「博物館はアカデミックでなければいけない」といつておられた。先生の言うアカデミックの意味をあらためて問い質したことは一度もなかったが、それは、単に「学術的」とか「学究的」というのではなく、「厳密な研究成果」を基礎として「興味をもって自由に学べるような」あるいは「広い教養を身に着けられるような」ということであると解釈してきた。このような先生の発想は、先生自身の厳しい研究活動を通して展開された学界・教育・社会・国際的活動の豊かな経験と実績から生れてきたものにはない。いずれにせよ、博物館の基本的あり方を示唆する名言であると思われる。実は、先生を語るときに欠かせないことは先生のお人柄である。しかし、残念ながら予定の紙面は既に終ってしまった。あらためて筆を取ることでお許しを願おう。

先生、安らかに眠り下さい。合掌。

(静修短期大学教授)

平成元年度日動水協北海道ブロック 秋期飼育技術者研究会に参加して

伊 勢 伸 哉

平成元年度秋期の飼育技術者研究会は、去る十月十二、十三日の両日、登別温泉のとさわ荘で道内の五動物園、六水族館の飼育職員が参加して開催された。一日目は研究発表と懇親会、二日目はのぼりべつクマ牧場などの施設見学が行われた。この研究会は毎年春と秋の二回、飼育動物の生態、繁殖、臨床や各園館で行っている教育普及活動の報告などが発表されるが、今回もとても内容の濃い発表ばかりで、お互いに参考にするところが多かったように思われる。私の独断で決めさせていただけなら、今回の発表で一番興味をひかれたのは、釧路市動物園住吉尚氏の「ゼニガタアザラシの繁殖計画について」というものである。現在ゼニガタアザラシは道内七園館で飼育され、このうち六園館では複数飼育である。こ

の六園館のうち三園館は同一ベアリーにより生まれた個体で、兄妹による近親交配で生まれ、たとえろもすでにあるため、ゼニガタアザラシ飼育園館で協力しあつていかなければ近親交配をさせて繁殖群を維持していくことができない状態となつている。このため、各園館の積極的な協力が必要であるという内容であつたが、これは何もゼニガタアザラシだけに限つたことではないのではなからうか。動物園や水族館で飼育しているものの中には、比較的繁殖しやすいもの、一方でとても神経質で種々の条件がそろわなければ繁殖しないものなど、その動物の種によつてさまざまである。

動物園の目的の一つに「種の保存」があるがそれを達するには近交を除外しては考えられない。近親交配が進むと、繁殖力、抵抗力、その他あらゆる面で劣つてしまい、その種の絶滅にまで進みかねない。これを事前に防ぐには、道内はもとより全国の動物園、水族館が協力し、連絡を密にしてブリーディングプログラムを行つていかなければならないのではないだろうか。動物園や水族館は人間が人為的に作つたいわば閉鎖空間である。その中で種を保存してゆくためには、やはり人間が繁殖を考えなければならぬ。閉鎖空間であるからこそ、人間が関与しなければならぬのではないだろうか。同氏の発表は私にそれを痛切に感じさせるものだった。

もう一つは今回の共通テーマになつていた、「各動物園水族館におけるワシントン条約該当動物の飼育状況についての調査」である。近年、同条約の強化により生体はもちろん、はく製やその他の製品まで輸出入が厳しくなつた。そのため、ワシントン条約該当動物の特に繁殖に関しては国内だけで考慮し、ブリーディングプログラムを行わなければならぬ。同条約該当動物は特に希少種ということもあり、前述同様先を見越しての配慮が必要と思われる。

小樽水族館公社渡部満氏の「フンボルトペンギンのプロポーシヨンによる雌雄の判別について」という発表も興味をひかれた。これは雌雄判別の困難なペンギンを対象にした話である。皆さん、動物大好き人間であるため打ちとけるのも早いですが、私がいちも感じるのは、自分の無知である。いろいろな方の話を聞くだけで質問されても一向に答えられない。(自分がただ未熟者だけだが)しかし、この懇親会で聞ける話の一つ一つが先輩方の重要な経験の積み重ねであるため、私にはこれ以上ない、よい教材なのである。今回の研究会で聞くことのできたこと、一つ一つを自分の糧として日々努力していきたいと思う。



平成元年度日動水協飼育技術者研究会

（のぼりべつクマ牧場飼育係）

道北地区博物館等協議会 学芸職員研修会報告

保田 信 紀

道北地区の博物館等学芸職員
の研修交流が9月30日・10
月1日に天塩岳で開催されま
した。目的は「最近、自然環
境に対する住民意識の向上か
ら、野生動物等を対象とし
た自然観察会の要望が高まっ
ており、これに対応するため
学芸職員の向上を図る」こと
で、9月30日は麓にある立派
な天塩岳ヒュッテで事前学習
と交流会。10月1日は天塩岳
に登り自然観察学習会が実施
されました。くもり空で大雪
連峰への遠望はききませんで
したが、深まりゆく秋空の中
を、それぞれが楽しい情報交
流のひとときを過しました。

参加者氏名(順不同)

青柳信克、南尚貴、山下敦規、
鈴木邦輝、鈴木力、西谷栄治、
荒木正一、藪中寿治、鈴木敏
春、平松和彦、野田佳之、尾
崎功、朝日保、清水義一、加
藤敦、渡辺康之、保田信紀。

系の白雲岳において、有志に
よる自然観察学習会が開かれ
ました。その時、次の開催地
は「天塩川源流」と決まり、
今回、地元の上川市立博物館
の朝日保館長にお世話いただ
いたものです。ところが届い
た開催案内には、私が講師と
なっていました。それで何か
資料作成をと考えていたのが、
後でふれる高山性バツタに関
するものです。現在、道北地
区の巡回展で「高山の生き物」
を開催していますし、私も秋
に入ってバツタの調査を続行
中でした。それに天塩岳には
これまで四回の調査を行って
いるのですが、まだバツタの
発見に至っていません。でき
ればこの機会に現地調査の協
力をさせていただこうという魂
胆もあつたからです。

北海道の高山に生息する無翅・短翅型フキバツタ

ダイセツタカネフキバツタが
発見されました。その後の調
査で、大雪山系のほかに利尻
山、暑寒別岳、斜里岳、羅臼
岳、そして夕張山系の芦別岳
の高山帯に分布していること
が判明してきました。ところが
同じ夕張山系の夕張岳には
ダイセツタカネフキバツタは
生息しておらず、かわって平
地でも見られるサツポロフキ
バツタの個体群が分布してい
たのです。そしてさらに南方
の日高山系、羊蹄山、大千軒
岳なども、この高山に適應し
たサツポロフキバツタの分布
圏でした。どうやらダイセツ
タカネフキバツタは北海道を
大きく二分する北部と東部地
域の高山に限って分布してい
るようです。そして同じサツ
ポロフキバツタも夕張・日高
山系の個体群と札幌低地帯を
こえた道南地方の個体群とで
は明らかに地理的変異がみら
れます。こうした分布様相は
過去の地史に大きく起因され
ていると考えられるのですが、
この秋には、サツポロフキバ
ツタの分布圏である道南の遊

楽部岳で、思いがけずにもハ
ヤチネフキバツタの生息を確
認しました。この種はこれま
で東北地方のみに分布が知ら
れていた種です。これは北海
道の道南地方と本州の東北地
方との深い地理的関連性をあ
らためて裏付けてくれる発見
でした。

現在、北海道の高山からは
前記した三種のフキバツタが
知られています。これらはい
ずれも無翅あるいは短翅です。
そしていずれの分布地におい
ても混棲地は記録されていま
せん。これらを材料に、動物
地理、種間関係、あるいは種
分化などの問題を調査してい
くことは、今後の興味ある課
題であると考えられます。
ぜひ皆様方の情報をお願い
いたします。

(大雪山国立公園層雲峡博物
館 館長)

北海道の高山に生息する
無翅・短翅型フキバツタの分布



OA機器の利用②

苦小牧市博物館における
コンピュータの利用

佐藤 一夫

博物館や美術館におけるコンピュータの利用は、今や常識化し国立、県立などの大施設ばかりでなく、地方館園でも色々と活用されている。

苦小牧市博物館でも建設準備段階から、展示や資料管理等にコンピュータを利用すべく検討を重ねてきたが、実際に導入されたのは開館後半年程経ってからである。導入に当たっては、市の電子計算組織運営委員会により、その使用方法をめぐって、様々な問題が討議された。その最大の理由は、コンピュータの導入による施設の定数と健康管理の問題であった。

しかし、昭和六〇年の九月埋文調査センターに1号機が設置されたのを契機に数台づつではあるが導入され、現在では、博物館に3台、埋文調

査センターに4台、計7台が稼働している。

機種はすべてNECのPC-9801シリーズで、ラック・ブトッブ型が1台ある。機種

の統一はソフトとメディアの互換性を考慮した為である。さて当館での利用であるが

第一は、表計算ソフトを利用した、入館者の統計、予算執行など管理面での活用である。これは開館当初から、有料

無料、大人、学生、子供、団体、個人などの複雑な集計を時間、日、月、年各にコンピュータ処理し、事務の効率化を図っている。

第二にはデータベースソフトを活用した利用法である。

送業務での活用である。発送に当たっては、あらかじめ入力してある登録会員・関係団体や機関のデータを、必要に応じてタック紙に打ち出し、発送業務の簡略化と名簿の正確で迅速な把握を行っている。

その他にも、庁用備品の管理や文献の分類整理に活用している。

文書作成はワープロソフトを利用し、最も頻繁に活用しているコンピュータ機能の一つである。

第三の利用法は、当館で一番力を入れて行っている展示室での活用である。

博物館の3台のコンピュータは、1台は学芸員用として研究機材室に、他の2台は各々1階と2階の第一、第二収蔵展示室に設置されている。この収蔵展示室に設置されているコンピュータには、それぞれ、市内の遺跡と収蔵鳥類のデータが納められている。

次頁にその概要を示したように、遺跡一覧表では、遺跡名・コード・種別・時代等の情報が一目で判るようにしてい

る。この目的は、考古部門の展示を、より理解してもらうためと、埋文行政の仕事でもある埋蔵文化財の周知徹底をねらったものである。

鳥類目録は、昭和六二年三月に刊行した「苦小牧市博物館収蔵資料目録Ⅰ・鳥類所蔵資料目録」を入力したもので博物館に収蔵されている鳥類すべてが和名・学名・目名・採集年月日・採集地・採集者などによって検索できるようになっており、一般の野鳥愛好家から専門家にいたるまで好評を博している。

以上、現在苦小牧市博物館で実施しているコンピュータの利用について概略を紹介した。しかし、スタートしたばかりで内容については、今だ充分なものとは思っていない。今後は資料のデータバンク的な活用を主体としながらも展示面において、支笏湖や樽前山の生い立ちなどを、より視覚的なコンピュータグラフィックなどで展開したいと思

っている。また、他館園との情報交換

事務局日誌

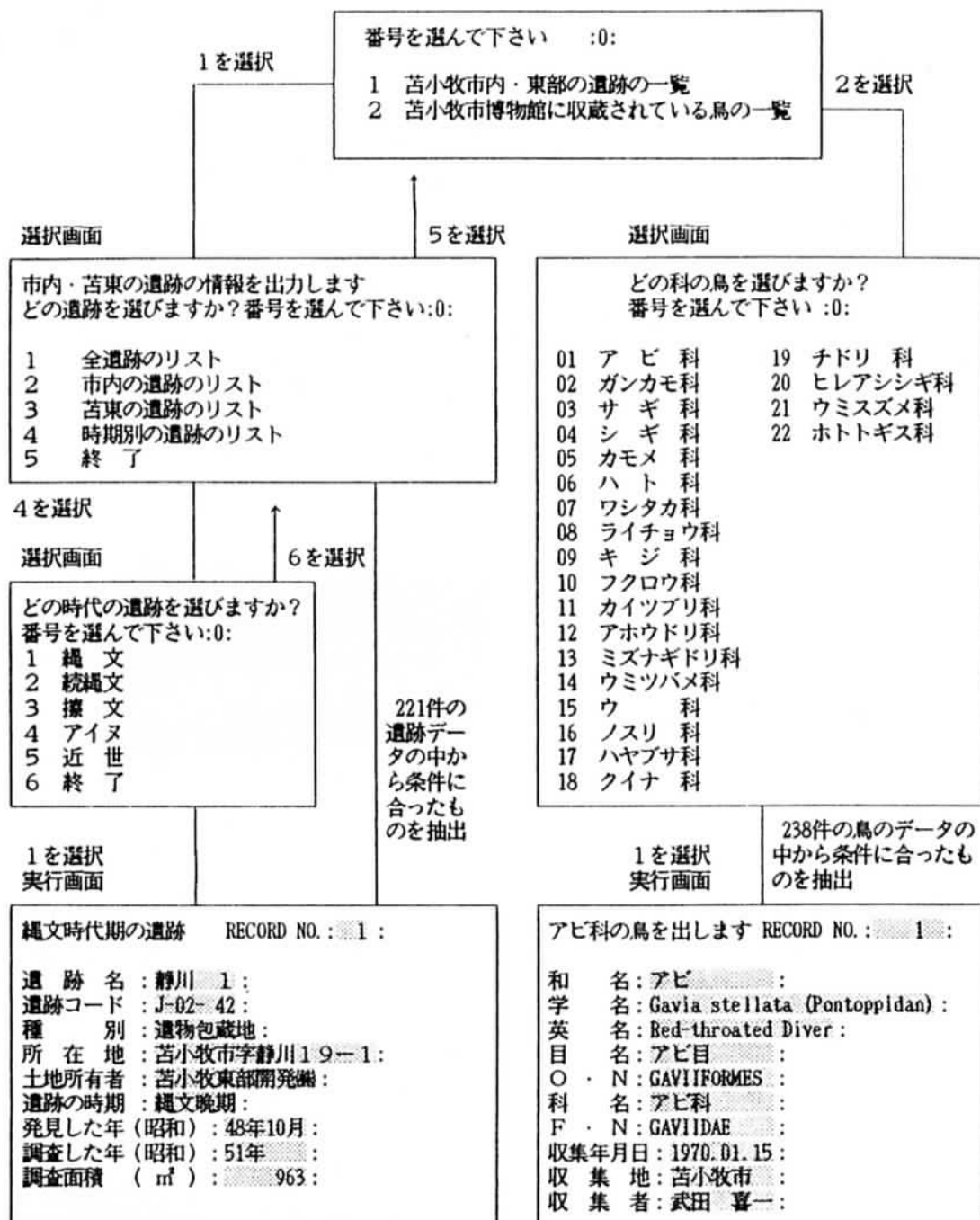
システム等も確立し、博物館が情報センターとしての機能を果たし、地域に密着したものにしなければと思っている。尚、この小文を書くにあたり苦小牧市埋文調査センターの大泉博嗣氏に教示を得た、感謝申し上げる次第である。(苦小牧市博物館次長)

第2回道博協役員会が11月15日(水)札幌で開かれ、次のような報告と協議が行われました。

- 1 大会後の一般経過報告
 - 2 大会結果報告
 - 3 学芸職員部会他関係職員研修会報告
 - 4 平成元年度日博協顕彰結果について
 - 5 後援、協賛依頼について
 - 6 犬飼哲夫名誉会長の訃報
 - 7 山丸副会長長地域文化功労者他の受賞
- 協議
- 1 平成2年度道博協大会(江差)について
 - 2 地区別博物館連絡協議会の組織化について
 - 3 道博協顕彰制度の導入について

博物館展示プログラム

初期画面



※の部分から5秒毎にスクロールして次の条件に合った画面を表示。

画面出力後は選択画面に戻り、再度選択可能。スクロールする時間は自由に設定可能。

データは実行画面の表示項目以上に登録されており(遺構・遺物その他)項目・レイアウト共に設定自由。

プログラムにはD-BASE II (アソシエイト社)を使用。

コンピュータを触ったことが無い人にも出来るようにテンキー(数字)のみで操作可能。

館 園 紹 介

小樽市博物館

明治26年、加賀商人西出孫左衛門と西谷庄八によって設立された「小樽倉庫株式会社」は、北海道における営業倉庫第一号でした。中央に事務所、左右に両袖を伸ばし、桁型に連ねた倉庫は中庭を配して6棟。その威容は加賀商人の権勢と北海道開拓にける意気込みを知るに足りるものです。

昭和60年9月、旧日本郵船小樽支店（重要文化財）から旧小樽倉庫株式会社（歴史的建造物）に活動の場を移した博物館は、小樽運河の隣接地という立地的環境も配慮して、展示資料を北前船によって発展し、北海道開拓によって築き上げられた商業都市の生い立ちに関するものに絞り込んでいます。展示テーマは「商業都市小樽のあゆみ」。それは総合博物館としては多少異論のある展示構想でありましたが、展示室が三九七㎡しかとれないという条件下で、大

胆な展示テーマの絞り込みは幾多の諸問題を抱える地方博物館の新たな試みです。倉庫と中庭を一体化して活用し狭さを補い、そして通りを歩く人々が入ってみたいと思うような外観のイメージづくりも効を奏して、年間の入館者数は、一〇万人を超えるようになりました。

現在、平成2年3月上旬の開館を予定して第二展示室の準備が急ピッチで進められておりますが、その内容の一部を紹介致します。

新展示室では、テーマを「自然ふしぎ・ふしぎ」の自然科学（生物）と「大昔・ヒトと生活」の考古学展示ですが、

双方とも各種機器類を導入し見学者が遊びながら学べる参加型の博物館を心掛けています。また考古展示では、忍路土場遺跡出土の資料を中心に、展示資料の全てを「縄文時代後期」に絞りこんでいますので、縄文時代後期の学習はしやすくと思います。そして、いろいろな機器類を活用した体験をもとに、自然の不

思議さと大昔の生活を楽しく思いただきたいと考えております。



小樽市博物館

よいち水産博物館

余市水産博物館は、北海道百年地域記念事業として建設され、44年6月開館した。余市は、北海道で最もニシン漁がさかんであった地域で、千石場所として栄えた町、又、ソーラン節発祥の地とも言われている。この、町開発の基礎となった往年のニシン漁に関する資料を主に、系統的な展示を行い、歴史の流れと、先人の息吹が肌で感じられる

ニシン博物館として知られております。

一階展示室は、漁網と付属道具、弁財船の模型等を展示。二階展示室は、水産一般関係資料、ニシン等水産標本、ニシン定置建網とイカ漁業の実際をパノラマにして展示。三階展示室は、ニシン漁撈に関する沖生活と陸上生活の関係資料、漁場の記録文書、余市場所漁業のパノラマ、漁船の模型等を展示している。

ほかに、歴史民俗資料館を昭和54年に併設、町内全域にわたる各種の遺跡より出土した土器、鉄器等の遺物や、アイヌ民俗資料等を展示している。特に、天内山墳墓よりの出土品は、有形文化財として北海道指定を受けており、又、大浜中や栄町より出土した、大刀、刀装具と鎧、陶・青磁器等は、全国的にも貴重な資料といわれている。この見学は、博物館の入場料でよい。大人百円、小人五十円、二十名以上の団体は二割引となる。休館日は、毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始。



よいち水産博物館

館の位置は、JR余市駅より徒歩15分、中央バス余市富沢町線余市町役場前より徒歩5分、町の中央部の海岸に近い小高い丘の上であり、屋上からの街や海の展望は好評。前庭には、詩人野口雨情、石川啄木の歌碑や、遠星北斗の句碑のほか、余市出身の英文学者で詩人和田徹三の詩碑がある。又、当館から徒歩にて10分のところに、江戸期の姿に復元した、国指定重文の旧下ヨイチ運上家もある。

（館長 三浦清治）

岩内町郷土館

岩内町郷土館は、昭和46年5月、町制施行70周年を記念してつくられたものです。一階展示会場、明治・大正と鎌倉全盛時代の漁具類―建網模倣型・鯨・刺網・櫂・大だも・中だも・モッコ・鯨つぶしの道具・鯨釜等当時使用された漁具類を豊富に展示している。次に昭和の初期まで岩内に住んでいたといわれるアイヌ民族の生活資料を数多く展示している。又林業・農業の生産活動に古くから使用されてきた数多くの用具類が展示されており、小学校の児童の学習に大きく役立っている。二階展示会場、教育、社会の移り変わりを示す寺小屋時代の机、明治年間の小学校卒業証書等の資料、鎌倉時代の生活調度品、更に一般家庭の生活調度品が展示されている。又今では大変貴重なものとなった岩内町大火の記録写真や場所請負人制度の頃本州との交易に大活躍した北前船（弁財船）を縮尺製作した精巧を

極めたすばらしい模型も展示している。

これは明、平成2年には東日本フェリー（株）の岩内港―直江津港フェリー就航が決定しました。その昔命をかけて北前船が就航し先人が築いたかつてのその繁栄を今再び目指して一万五千トン級のフェリーが就航しようとしている今日、正に今昔の感を深くするものです。二階出土品室 昭和31・32年の2カ年にわたり東山遺跡より発掘された今から五、六千年前先住民族が使用した縄文円筒下層式、上層式土器をはじめ、石器類が五〇〇点余展示している。



岩内町郷土館

二階文献室、明治2年旧藩を廃し開拓使岩内出張所が設置された当時の開拓使典義瀬真精氏が現職時代の文献。二階特別室、薄命の作家故有島武郎の「生れ出づる悩み」の主人公としてその名を知られた岩内が生んだ道文化賞受賞者故木田金次郎画伯の遺品・遺作を展示している。

（館長 吉田吉就）

京極町郷土館

京極町は羊蹄山麓の東端に位置し、東は無意根連峰を境に札幌に接し、南は喜茂別町と、西北は倶知安町、及び赤井川村にそれぞれ隣接している。郷土館は昭和39年9月から着工し、40年4月1日から開館している。郷土館建設にあたっては、「郷土を深く見つめ、文化財を学習する中で新しい町づくりの情熱をもち、開拓精神の高揚、郷土文化に根ざした町づくり、人づくり」を建設趣旨としている。

陳列資料の主たるものは、郷土開拓史に関するもので、明治30年の開拓当初頃に使用

した農業用具（クワ・スキ・押切等）、生活用具（炬かき・ランプ・たんす等）、衣類（紋付・伴天・マント等）、その他（煙草入れ・刀剣・教科書）が展示されている。その他の陳列としては、脇方鉾山（明治30年に発見され、大正5年には



京極町郷土館

べしの千代ふる雪に照る日景見む」

昭和31年11月3日、松浦武四郎のようなりつばな青年になつてほしいという願いを込めて郷土館の前に建てられた。郷土館のそばには青年の家・ふき出し公園があり、年々来町者が増えており、今後、郷土資料の整理・充実が課題である。

（社会教育主事 葛西良紀）

神恵内村郷土資料館

資料館はこの地域の歴史とその文化遺産を紹介し学習する場として昭和62年4月に資料四百余点を展示し開館した。展示の構成は次の九コーナーから成っている。

（一）私たちの村・神恵内では神恵内の自然を。（二）カモエナイのあけぼのでは、土器・石器・骨格器など観音洞窟の発掘遺物を。（三）場所のはじまりでは、慶長年間に松前藩が場所を設定してからの和人の来往や場所請負人による漁業開発の姿を。（四）ニシン漁のあゆみでは、漁法の変遷・漁場の

仕事・漁獲量の変遷・漁具・袋澗などを。(五)生活のあゆみでは生活用具など。(六)映像コーナーではレーザーディスクによる映像展示などを。(七)行政のあゆみでは藩政・幕政時代・戸長時代・二級町村時代・地方自治時代そして現在に至る行政の歴史を。(八)文化遺産では川白かぐらとしし舞いの再現を。(九)新しい神恵内村では、観光や養殖漁業の現状などを紹介している。

(社会教育主事 九十房孝和)



神恵内村郷土資料館

館園の主な行事案内

(1月～3月)

●札幌市資料館

- 1・4～3・25 北海道川柳展 会1・7、写真コンテスト作
- 札幌市青少年科学館 品展3・11～4・8、年中行
- 札幌市天文台夜間公開1・31 事「鏡開き・どんど焼き」1
- 2・4、2・11～2・4、15、「ひなまつり」3・3、
- 3・7～3・11、冬休み特別 伝統遊具づくり「蝦夷凧」1
- 展「メカメカマイコン大集合」 6～1・13、「お手玉」2・
- 1・5～1・15、春休み特別 1～2・8、「折りびな」2・
- 展「(仮)、光と色のマジック」 25～3～3
- 札幌市円山動物園 特別展「子どもと親の美術館」
- 千支パネル展1・1～1・16、 1・5～1・28、「北の建築
- 手作り年賀状コンクール1・ 家たち」2・21～2・28、「木
- 1～1・7 田金次郎と神田日勝の世界」
- 豊平川さけ科学館 3・4～3・25、ビデオギャ
- 1月 一日飼育係、2月豊平 ラリー1・13、1・20、1・
- 川、冬の林間学校 27、映像の冒険2月上旬
- 札幌芸術の森 27、映像の冒険2月上旬
- 1月～3月、フォトコンテス ●知内町郷土資料館
- ト作品展、2月 ウィンター ふれあい体験塾1月
- アートウィーク ●道立函館美術館
- 北海道開拓記念館 東ドイツ現代美術展1・6～
- テーマ展「北海道の馬」1・5 2・18、ガラスの美展2・25
- 2・11、テーマ展「玩具の 3・25
- 移りかわり」2・17～3・31、 ●小樽市博物館
- 講演会「骨からさぐる馬の進 歴史講座「凧づくり」1・15
- 化」2・4、講習会「わら細 ●小樽市青少年科学館
- 工」3・10～3・11、観察会 講座「工作会」1月、3月、
- 「動物の足跡を追う」3・18 子供映画会、冬休み期間
- 北海道開拓の村 旭川青少年科学館
- 開拓の村写真コンテスト撮影 科学館クラブ1月～3月、各
- 種教室1月～2月、プラネタ ●室蘭市青少年科学館
- 冬休みマイコン教室1月、親
- 子工作教室2月
- 室蘭市民俗資料館
- 企画展「冬のくらし展」～2
- 月、講習「伝承技術を学ぶ会、
- 水引・折紙」3月
- 本別町歴史民俗資料館
- 展示「石器展」2・19～3・10
- 平成元年度
- 日本博物館協会顕彰者
- 日博協顕彰規定に基づき、
- 次の方々が顕彰されました。
- 〈規定一号〉
- 新庄久志(釧路市立博物館)
- 三野紀雄(北海道開拓記念
- 館)
- 畑山義弘()
- 平川善洋()
- 会費納入のお願い
- 平成元年度の会費の納入を
- 左記によりお願い致します。
- (会費)
- 団体会員 一五、〇〇〇円
- 個人会員 三、〇〇〇円
- (取扱金融機関)
- 北海道拓殖銀行 新さっぽ
- ろ支店 普通 〇一八六一二
- 八七〇〇〇
- 振替 小樽七二二九四一九